# 夢話・六
# ブラッディフォロワーズ

大城拓人

Published by Takuto Oshiro
Copyright © 2011 Takuto Oshiro All right reserved.

# ブラッディフォロワーズ

　凍てついた小枝が風に揺れ、氷の礫を僕達の乗る車のフロントガラスにぶつけると、直ぐ前を走っている車のタイヤの跡が血染まり始めた。
　案の定、だ。
　いつも通り。思わず舌打ちしてしまう程、それはグロテスクに赤黒い。
　だが、またこれもいつも通り、僕はその血染まった瞬間を見逃してしまっていた。
　…本当に、いつもそうだ、いつも、僕はぼんやりし過ぎて、重要なことを見逃す、見落とす。
「早く帰りたい」、と僕は切に思い、泣き出したくなった。
　　僕は怒りと絶望が混じった眼を前の車のリアウインドウ、及びナンバープレートに浴びせた。
　運転席の相方がバックミラー越しに「駄目だ、止めろ」、と無言で睨みを効かせてきたので、僕はつかさず１２０％、嘘の笑みを浮かべてみせた。
「わかってるよ」、と僕もバックミラー越しに相方に向けて、崩れそうな心を食い止める為、努めて素っ気なく、そして多少強気に言った。
　確かに、僕の行為は良くなかった。
　やはり僕は情けない。そして何をするにもぎこちない。

　程なく、陽光に晒されたアスファルトに刷り込み、染み込んだ、タイヤの跡の形をした血から、牛そっくりの顔をした、それでも人間とわかる顔が現れていた。

　佐藤くんだ。
　高校時代の同級生で漫画家志望だった佐藤くんだ。
　と僕は思った。

　こういう風景は見慣れてしまっている。
　だが、胸に来るものがあった。
　その心の揺さぶりには到底慣れるものではないし、嘘は付けない。
　同情は禁物だが、解ってはいるのだが、可哀想に、良い奴だったのにな、と思った。
　その僕の動揺に気づいたか、相方が実にわざとらしい咳払いした。

だが、もう遅い。

その牛面佐藤くんの顔の背後には、また隙間なく牛面佐藤くんが顔を出しており、前の車のタイヤの跡から、にゅん、にゅん、と次から次へと牛面佐藤くんは顔を出した。
『彼ら』、佐藤くん達は己に向けられた憐れみや同情で、その邪な力を増幅させる特性を持っている。
そして一旦、こちらと『彼ら』の波長ーー心のリズムという奴だーーが合ってしまうと、虜になってしまう、つまり佐藤くん達に意識を乗っ取られてしまう危険性があるのだ。
そこまで行かなくても、シンクロしてしまった者は往々にして我を失ってしまう。
意図せず、僕はハンドルを握る相方の細い手首を掴んだ。
車はやや右によれ、大幅に減速した。
電光石火の如き速さで、相方は僕の顔面を拳骨で殴って来た。
当然、即座に鋭く硬質な痛みが僕の頬を貫き、僅かな間、見えている世界が暗転し、僕は相方から手を離し、真後ろによろけて強かに、後頭部を座っている助手席の窓ガラスに打ち付けた。
「何も出来ない見学坊や。お前の存在はお客様の信頼を損なう、生きている価値はない」、と鋭く、冷たく言い放ち、相方は車を元通りの態勢、スピードに戻した。
「ごめん」、鉄の味で染みる口元を拭いながら、僕は呟いた。
「坊や」「生きている価値はない」、その２つの響きが僕の自尊心をこれ以上なくざっくり引き裂いた。
「帰りたい、帰りたい、帰りたい！」、当然声には出さないが、僕は殆ど泣き叫びたくなっていた。もう１秒たりとも、この場に居たくはなかった。帰らせてくれるなら、発狂しても良い、結果、相方にボコボコに殴られても良い。
だが僕は無言でアクセルを踏む相方を見て、きっとそうなっても、相方は僕を撲殺して終わりにするだろう、…と思った。
僕はとりあえず、それ以上考えるのを止めた。

前を走行する車は実に禍々しく、化け物となった佐藤くんを産み続け、僕達は常識的と言い換えて良い程事務的に、そのブラッディなタイヤの跡に沿って、佐藤くん達の牛面を畑に植わる野菜のようにぶちぶちと潰して行った。
途切れ途切れに、僕は思い出したように絶望し、前の車に対して怒りを抱いたが、その都度、僕は「無、無、無、無」、と腹の奥で繰り返し唱えた。
落ち着く。
小学校の頃、祖母から教わって以来、ずっとやり続けてきた自家製まじないなのだが、これが不思議と僕の心の波を鎮めるのだった。
僕達は絶望や悲しみに襲われたり、怒りそうになっても、仕事の上ではそれら揺れる心を何としてでも封殺しなければならなかった。
憐れみ、同情はもとより、不条理すらも呑み込まなければならなかった。

僕達に課せられたことはただ一つ、ひたすらに己を殺し、鋼鉄の魂でもって、ひたすらにこの化け物共を潰し殺して行くことだけだった。
僕達の仕事とは、そういうものだった。

今こうして、タイヤの跡から生まれた佐藤くんはタイヤに潰されて往生する。ああ、これぞ、真の往生。この世は無常だな。
…と、僕は以前に何度かコンビを組んだことがある、とある先輩の口調、声色、そしてその唇の動きを脳内で再生しながら考えた。
僕は決してその先輩を尊敬している訳ではない。むしろ大嫌いであった。 身の回りの物事に対してドライで冷徹であったからだ。 また強欲であり、その癖上昇志向がなく、暴力的で、学歴のあるものをどこか見下しており、見識は猫の額より狭かった。
しかし、仕事の上では見習うべきところはあった。そういう先輩の思考の方向性が僕達の間では優良とされていた。自分でも悔しいことだが、仕事が出来なく自分の不甲斐なさに打ちのめされる度に、先輩のようになりたいな、と正直、心の奥底では思っていたのだった。
その先輩は強い。強さは善だ。
僕は強さに憧れている。
これだけ厭なこの仕事でも、その場その場では帰りたいと思ってはいても、結局辞めないのは、きっと僕に「強くなりたい」という男として当たり前の思いがあるからなのだろう。
生まれ落ちて以来、ひたすらにテストで点を取る為の勉強をして来た僕には、決定的に現実的な『強さ』が欠けていた。
ちらっと、僕は相方を見た。眼に先輩のそれと同じような光を宿していた。
やはり、成程な、と思った。やはり僕はこういう眼を持ちたいと切望していたのだった。
もしかしたら先輩や相方達は、本来は僕と大差のない心の強度の持ち主なのかも知れない。この仕事をこなすにあたり、敢えて冷徹な態度を取り、屈強な風を装っているだけなのかもしれない。
僕との違いはただそれだけのことだけだとしたら、それこそ相方達は大したものだと心底思う。全ては仕事の為に、顧客の為に、覚悟を決めて我を殺す。その結果が、僕から眼から見れば、憧れるべき『強さ』になっているのだ。
強さ、というものを手に入れるのは難しいことではない。覚悟するかどうか、それだけだったんだ。

くそ、やっぱり僕は『坊や』だ、何も成長していない。生きる価値なんてない。またぼんやりしてしまっていて、その変遷の瞬間、を見逃した。
佐藤くんはいつの間にかタケヒロに変わっていたのだった。
晩冬の路面から続々と生えて来た幼馴染だったタケヒロは、揃って死んだ時と同じく野球帽を被り、トラックのタイヤの跡がくっきり付いた崩壊した顔から助けを求める眼を一斉に僕に向けて来た。
僕は覚悟した。

２６年間、固く結ばれていた、脳内に張っていた見えざる紐を解いた。
「俺の往く道を邪魔するな！」、と僕は心の中で咆哮し、今までにないぐらいに眉間に皺を寄せ、眼をあらん限り吊り上げた。

刹那、眼の錯覚ではない、半透明の、それでいて重量感のある鉄の質感をもった巨大な槍状のものが、僕達の直ぐ前方のタケヒロの顔面を吹き飛ばし、あっ という間に後続に増殖していた他のタケヒロ達を一気に突き刺して行った。
相方が微かに口角を上げた。

成程、そうか、そういうことか、と僕は思い、合点した。この感情か、こういう荒ぶる心を、僕は『彼ら』に叩き付ければ良いんだ、と。

これを境に、永らく胸を覆っていた霧が、音を発てて、さあっと晴れ渡った。
ここに来て、ようやく僕は強くなる一歩を踏み出した、この仕事のコツを掴めて来たのだった。

僕はもう一回、眼の前のタケヒロに先程と同様の怒りをぶつけた。
突き刺し木っ端微塵にするようなイメージ。蹴散らすイメージ。それと共に、それらにキャプションを付けるように、心の中で思いっ切りタケヒロを罵倒する。
すると同様に槍が空中に現れ、思い描いた通り、タケヒロ達を爽快な程豪快に串刺しにして行った。
怒りの劫火を消すと、それに呼応して槍もぱっと消えた。
僕は思わず、満面の笑みを浮かべてその場で舞い上がってしまいそうになった。しかし、怖い相方の手前、何より強きプロフェッショナルとして、それは出来ない。今は喜びの全てを抑え、可能な限りシリアスな仏頂面を作ることにした。
そして相方に見付からないように、僕は小さくガッツポーズをした。

僕は偽りの怒りを全力で『彼ら』にぶつける、それが僕のこの仕事に対する覚悟であり、この仕事をこなす為に必要な武器となった。
確かに、僕は『彼ら』に対して、憐れむ、という『我』を殺している。
一般的に見れば僕の『我』は、優しい、と言えるのかも知れないが、その優しさを文字通り押し殺すことで、僕は現実として憧れの『強さ』を手に入れることが出来たのだ。
強い、というのは、優しい、ということです。
なんて台詞は実に薄っぺらい嘘だ。少なくとも僕には当てはまらないし、そうである以上、普遍的な真理ではない、と僕は思う。

始めこそ半ば無理に出した偽りの怒りであったが、回数を重ねていく内に、自然に沸き立つ本物の怒りのようになって来ていた。

　僕は車の助手席から槍を出し続け、現れる先からタケヒロ達を突き刺して行った。もうそうなると、相方が操作する車はタケヒロを潰さなくなっていた。
　この短時間で僕は人間が丸ごと変わってしまったかのように、鏡を見なくてもわかるぐらい、険しい、強い、先輩達のような顔付きになっていたのだった。

　タケヒロの次は田中が生え、そして田中の次は美人で有名だった神楽崎が生えて来た。

　ここまで来ると、僕は「怒りを出す」とわざわざ不自然に意識しなくても、相手をちょっと睨んだだけで槍を発射出来るようになっていた。
　流石の相方も、「凄いじゃないか」、とやや驚きの色を含めてぼそっと呟いた。知り合って約１０ヶ月、初めて聞いた相方の人間らしい声であった。
「だが」、と相方はバックミラー越しに僕に一瞥をくれながら続けて呟いた。
「わかってるだろうが、やるのは『彼ら』だけだぞ。そこら辺はしっかりわきまえとけ、間違っても…」
「わかってるよ」
　僕は先刻とは違い、強気がサマになっている声で相方に返した。

　当然、僕達は、正確に言えば僕は、正しく雨後の筍さながらに前の車のタイヤ跡から生えてくる『彼ら』を、一体も漏らさず刺し殺して行った。
　僕達が『彼ら』と呼んでいるモノ。それはつまり、…未浄化な霊、…俗に言う悪霊という存在だ。奴らは死んだばかりの者の魂を自分たちの世界に引きこもうとする。
　また実に残念なことに、どういう訳かその悪霊共の大半は生前、僕の知人だった奴らなのだ。しかも、生きることに前向きっだった奴ら、将来に希望の光を見出していた奴らばかりである。
　例えば、最初の牛のような顔をして現れた佐藤は、度重なる出版社への持ち込みが功を奏し、やっとのことで担当編集者が付いた。しかしその矢先に神保町で通り魔に刺されて死んでしまったのだ。
　これから俺は売れっ子漫画家になるんだ、サインを貰っとくなら今の内だぞ、とあれ程はしゃいでいたのに。
『彼ら』となった佐藤には憐れむ気持ちは最早微塵もないが、生きていた佐藤が死んでしまった、という現実には正直に、残念だな、と思う。
　それは他の『彼ら』となった者達にも、僕は同じ感情を持っている。

　僕は変わらず出てくる神楽崎を片っ端から木っ端微塵にし、その肉片を周囲にまき散らした。僕達の車のタイヤはそれらの多くを轢いてミンチ状にした。
　相方は元通り押し黙り、前を行く車と離れすぎないように、かつ近すぎて槍の攻撃に巻き込まれてしまわないように、スピードを調節して車を進めさせている。
　前の車はその直ぐ後方で起こっている、僕達のそういうドラマを知ってか知らずか、終始淡々

と一定の速度を保って滑らかに走行を続けているのだった。
　前に行く車というのは、そう、霊柩車だ。
　僕達の仕事はその車の棺の中で眠る『お客様』を『彼ら』の手から守ること。つまり、僕達は死人のボディガードなのだ。

　棺に入っている『お客様』は、男か女か、幼児か、老人か、働き盛りの人か、それはわからない。
　知る必要はない、僕達には。
　興味がないことなんだ。
　この業界に入って以来、ずっと先輩達から叩き込まれた理念だ。
　興味を持つな、同情するな、希望を抱くな。
　重要なことは、如何に効率よく『彼ら』を殺せることが出来るかどうか、ただそれだけなんだ。少なくとも、この仕事上においては。
　…冷徹だと思われても構わない。
　その理念そのものの意味と、それを刷り込まれた意味が、ここに来て徐々にわかって来た。
　心の動揺を隠すことが出来るなら、鬼にだってならなければならないのだった。
　感情は持つな、とは言われていない。感情は武器にすれば良い。
　僕達にとっては、それが全てと言って良い程、大いに必要なことであったのだ。

　まだまだ日没まで時間はある。
　やっとのことで読者モデルでハリウッド女優を夢見ていた神楽崎が全滅し、今度は校内一の不良から立ち直り弁護士を目指していた吉川が生えて来た。
　僕はただただひたすらに、槍を出し続けた。頭が痛くなり出し、眼尻が熱くなり出し、気が遠くなり掛かったが、僕は気力を振り絞り、踏ん張った。
　今は技術を習得し、この仕事を覚える時なのだ。
　これ以上、相方に差をつけられないように。同い年の同期入社をした者として、 いや、それ以上に男として。勿論、『強さ』を持つ相方は尊敬するが 、もう『見学坊や』とは呼ばせやしない。
　つくづく相方は、正に『鉄の女』だと思う。
　この職種に合致した精神の持ち主だと思う。
　異性としてはさっぱり惹かれないが。
　だからこそ、僕は彼女に負けたくない。

……いや、
　　いや、いや、
　　いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや いやいやいや
　　いやいやいやいやいやいやいや、

彼女だけではない、僕はこの業界の誰にも負けたくないんだっ！
遠慮はいらない、怒りに正直になろう。これを見ろ、この現実を見ろ！
僕は強い。
今の僕は誰にも負ける気がしない。
あと１ヶ月後には新入社員が入ってくる。僕は先輩になる。
ちょっと前の、変わる前の僕のような軟弱な、ゆとりくん、が入ってきたら、早速この業界の厳しさを教えさせてやろう。
理念を叩き込ませてやろう。その甘ったれた我を、この強い僕が直々に取り除いてやろう。
この僕のような優秀な、会社の役に立つ強い人間にさせるんだ。
それが彼らの為になる、絶対に！

僕は指を鳴らし、笑った。生まれてから一番清々しい笑みを作った。

凍てつく春一番が吹き、またしても氷の礫が僕達の視界を遮った。

# 夢話・六　ブラッディフォロワーズ

http://p.booklog.jp/book/21925

著者 : 大城拓人
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/takuto-oshiro/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/21925

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/21925